

日本医師会インターネット生涯教育協力講座〈外来で遭遇する皮膚疾患とその対応〉

外来で遭遇する皮膚疾患とその対応 - 7

皮膚科医へ紹介するタイミング

● 総監修 ●

大阪大学大学院医学系研究科

情報統合医学皮膚科学講座

片山 一朗

皮膚科医へ紹介するタイミング

【1】皮膚筋炎

○皮膚筋炎

- 全身疾患に由来する皮膚疾患はデルマトロームとして知られており、注意が必要である。
- 皮膚筋炎は自己免疫性疾患であり、皮膚、筋肉、肺、心臓などが障害される。
- 皮膚症状：上眼瞼の浮腫性の紅斑、手指関節背面の鱗屑を伴う紅斑、肘・膝の伸側に鱗屑を伴う紅斑など。
- 50歳以上で皮膚筋炎がある場合は、高率で内臓の悪性腫瘍がある。
- 筋力低下や脱力などの症状が出ない場合があるため、ステロイド外用薬などで治療せず、すぐに専門医に紹介する。



【2】広範囲の帯状疱疹

- 免疫機能が低下した患者さんなど皮膚症状が広範囲に及ぶ場合、あるいは夜眠れないほど痛みが激しい場合は、早期に専門医に紹介する。



【3】貨幣状湿疹に進行した皮脂欠乏性湿疹

- 皮脂欠乏性湿疹の重症化には、薬剤による接触皮膚炎などの合併症や基礎疾患が関与している場合がある。
- 皮脂欠乏性湿疹が進行すると、境界が明瞭な貨幣状湿疹、さらに自家感受性皮膚炎が生じることがあり広範囲に痒みのある丘疹が多発する。
- 皮脂欠乏性湿疹から貨幣状湿疹に進行した場合は専門医に紹介する。



【4】改善がみられないアトピー性皮膚炎

- ガイドラインに従って1ヵ月程度治療しても、皮疹の改善がみられない場合は専門医に紹介を考慮する。



【5】まとめ

- 治療効果が十分に現れない患者さんに対しては、漫然と長期間、同じ治療を続けずに、基礎疾患や合併症による影響も考慮する必要がある。
- 日常診療ではいわゆる Common skin disease として治療されている患者さんの中にも重要な全身性疾患が隠れていることも多く、注意が必要である。
- 皮膚疾患の治療は正確な診断から始まる。
- ガイドラインに沿って治療を行い、予想した治療効果がでていない、あるいは反応が悪い場合、皮膚科専門医と連携して治療を行う姿勢が何より重要である。